
ACE COMBAT 5 The Unsung War

KZK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A C E C O M B A T 5 T h e U n s u n g W a r

【Nコード】

N 1 3 8 4 B A

【作者名】

K Z K

【あらすじ】

小惑星ユリシーズの飛来から数年、ユージアでのISAFと軍事大国エルジアとの戦争より5年ほど経過した2010年。オーシア連邦の最西部に位置するサンド島空軍基地にユニークな男がいると聞いて取材に来ていた記者のアルベル・ジュネットは訓練中の隊長機の後部座席にて演習をカメラに納めようとしていた。しかし、突然基地管制塔より無線連絡が入る…。

プロローグ(前書き)

エースコンバットは是非映画にして欲しいゲーム作品の一つです。

今回は自分なりに物語をいじりながら投稿して行きたいと思います。

プロローグ

15年前に戦争があった。

いや…戦争なら遙か昔から何度となくあった。

ベルカ公国と呼ばれるオーシアの北に位置するその国は、歴史上幾度となく南の土地を目指して侵攻を繰り返した。

運に恵まれぬ彼らに勝利が続くはずはない。

彼らは時代が変わったことに気付かなかった。

敗戦を繰り返しては領土を失い小国に戻りつつあった彼らは比類なき工業力を養いそれを武器に世界に向かって最後の戦いを挑んだ。

それが15年前の戦争。

彼らは猛々しく戦い、惨敗した。

迫りくる連合軍の侵攻を防ぐために自国の領土内で7つの戦術核を使うという愚さえ犯したベルカ人。

自らの町を蒸発させ、彼らは自らを北の地へと閉じ込めた。

その無残を目にした戦勝国たちは、自らの持つ武器を捨てようと心に誓った。

世界に平和が訪れた。

そして、それは永遠に続くものかと思われていた…。

あれから15年後の現在。

2010年9月23日、オースリア連邦、セレス海の孤島・サンド島。

平和から最も遠いこの島で平和を守って飛ぶ彼ら。

物語はここから始まる。

” レッドアラート!! ”

その時私は空中にいた。

編隊長機の後席から

演習の光景をカメラに収めようとしていた。

前席が地上に向けて吠えている。

【F-4】の狭いコックピット内、上空5000mを飛行する10機の練習機編隊。

唐突に無線が開く。

” ピピッ ”

「無茶言つな。新米の面倒見てんだぜこっちは。」

《通信指令室よりウォードッグ。不明編隊のコース、ランダース岬

を基点に278から302。バートレット大尉。サンド島の貴隊にしか間に合わない。》

「っち。ベイカー。スヴェンソン。後ろにつけ。教官のみで侵入機を迎える。残りは低空へ退避しろ。」

《ベイカー。了解。》

《スヴェンソン。了解。まったく・・・今日は厄日だぜ。》

「無駄口叩くな。スヴェンソン。舌嚙むぞ。」

編隊は二手に別れる。

「ジュネット。悪いが付き合ってもらっぜ。キツかったら寝ちまいな。」

大尉の宣告と同時に機体が唸り声を上げる。

世界がひっくり返り。

胃が裏返った。

「すまねえな。」

着陸後そんな場合でもないだろうに隊長は私に謝った。

通信指令室の犯したミスのために教官1名と練習生6名が戦死、さらに教官1名が着陸時にクラッシュ、計8名が死亡した。

この人の責任ではない。国籍不明機が躊躇いなく打ってきたのは……。

そして交戦の最中、練習生を逃がした場所が敵の真正面だったことは……。

交戦終了後、無事に基地へと戻れたのはたったの2機だけだった。

「あの07の機体。あのパイロットの反撃は見事でした。」

「見てられん……。ナガセ。あんな飛び方したら死ぬぞ!!。」

「…死にません。」

ただひとり生き残った新米パイロット。

ケイ・ナガセ少尉はささやくようにそう言った。

短髪黒髪の彼女の表情には交戦後の疲れが見える。

「虫も殺しませんって面してやがるぜ。」

呆れ顔のバートレット大尉。

そのまま格納庫へと歩きだす。

私は自分の愛機の側に佇む彼女にカメラを向けた。

”パシヤッ”

私の向けたカメラに彼女はわずかに微笑んだ。

しかし、その写真はカメラごと基地守備兵に取り上げられてしまった。

宣戦布告もなく行われた戦闘の証拠が拭われてゆく。

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

誤字脱字にはできるだけ注意してまいります。

極西の飛行隊 前（前書き）

今回はブレイズ視点です。

極西の飛行隊 前

国籍不明機との交戦から1時間後、ブリーフィングルームに練習生達が集められた。

目の前に座るのはこの基地唯一の教導官となってしまうたバートレツト大尉。

その表情には疲れが見える。

「おいアレックス。」

俺の隣に座るアルヴィン・H・ダヴェンポート少尉、お調子者でお喋り大好きな彼が唐突に話しかけてきた。

「いつもブレイズと呼べと言ってるだろ。なんだ？ダヴェンポート少尉。」

「かあゝ相変わらず堅いね。階級同じなんだから一々少尉なんて付けんよ。」

堅いとは余計な話だ。

「これは癖だ。」

親父が軍属だったこともありイマイチ砕けた話し方が苦手なのだ。
。。
こればかりはしかたない。

「まあいいけどよ。それよりどつどつ思いつ？」

「何がだ?。」

「おいおい決まってんだろ。この陰気癖えブリーフィングについてだよ。」

まあそんなとこだろうな。先の戦闘で戦死した者たちについてはすでに敵命令がしかれている。

遺族に何も知らせられないのは辛いことだ……。が我々は軍人だ。割り切らなければならない。

しかしいくら軍人と言っても俺達も人間だ。仲間を失った悲しみはどうしても胸の内から滲み出てしまう。

まあ中には我解せずって奴らもいるが……。

「ふむ。おそらく次のスクランブルのメンバー編成を決める為だろうな。その証拠にここにいる連中は全員一等航空士以上の者が集まっているしな。」

「やっぱか。はあくダルイねえ。飛ぶのは好きだが、敵さんと命がけの追いかけてはごめんだね。」

「残りの機体数から見ると4機編隊のローテーションスケジュールになるだろうな。」

格納庫にある機体は隊長の【F-4】1機に訓練用【F-1】が4機か……。

「大尉を含めた計4人、成績重視でいくと俺とダヴェンポート少尉、あとは……。」

「あー。文句の山ほどもあるうが人手も足りん。」

先ほどまで椅子に座り上を仰いでいた大尉が急に話を始めた。全員の視線が大尉に集まる。

「明日からは新米共もスクランブル配置だ。上では俺のそばから離さん。」

予想道理。実践経験のない俺達にもスクランブルがかかってきた。

「ナガセ。」

「はい。」

ケイ・ナガセ少尉。先の交戦での唯一の生き残り……。

「お前は俺の2番機だ。目をつけてねえと何しでかすかわからん。」

大尉の言葉にナガセ少尉は顔をしかめた。

「残りの奴らについてはまずアルヴィン・H・ダヴェンポート少尉、貴様だ。操縦に遊びが見られるがその柔軟な機動は実戦で役に立つ。」

「お褒めに預かり光栄です。隊長殿。」

「ふつ。そして次に貴様だアレックス・レイ少尉。訓練下での撃墜記録並びに冷静な状況判断力から貴様を連れて行く。」

「以上が選抜メンバーだ。他の者たちは後日編成資料を配布する。ここままで何かあるか?。」

まあ妥当な選出だな。

「では、解散する。」

後日、2010年9月24日

ブリーフィンググループ

「諸君、楽にしまえ・・・と言いたいところだがそうもいかん。由々しき緊急事態である。ブリーフィングを進める。」

丸々と太った中年男。我らが基地司令ことオーソン・ペロー中佐より任務概要が告げられる。

『オーシア連邦領空に再び国籍不明機が侵入した。国籍不明機は警

告したにもかかわらず領空侵犯を続行したため、オーシア海岸警備隊がSAMを既に発射した。ミサイルは国籍不明機に命中したが、撃墜には至ってない。被弾した機は一転洋上への離脱を目指し、高度を下げつつも依然として飛行中である。国籍不明機を捕捉し正体を解明するため、地上へ強制着陸させよ。なお、許可あるまで発砲は禁ずる。」

ブリーフィング終了後パイロットスーツに着替えた俺は廊下で偶然ナガセ少尉とであった。

「確かケイ・ナガセ少尉だったな。俺はアレックス・レイ。階級は少尉。コールサインは”ブレイズ”だ。ブレイズと呼んでくれ。」

「ブレイズ……。私のことはご存じの様ね。」

「いや。知っているのは名前と階級、そして練習生唯一の実戦経験者と言うことだけだ。」

「そう。なら一応こちらでも自己紹介しておくわ。ケイ・ナガセ少尉。コールサインは”エッジ”よろしくね。」

「ああ、此方こそよろしく。」

俺達は互いに握手した。自分で言うのもなんだが悠長なことである。

「では急ごう。ナガセ少尉、大尉より先にいかなければ……。後が怖い。」

「ええ。」

そして俺達はその後の会話もなく格納庫へと足を進めた。

ちなみに格納庫にはすでに大尉の姿があり、軽いお叱りを受けてしまった。

その後ダヴェンポート少尉とのくじ引きで俺は編隊の4番機となった。

極西の飛行隊 前（後書き）

自分の中でのブレイズはお堅い感じですが、
皆さんはどうですか？

極西の飛行隊 後（前書き）

今回はチョッパー視点です。

極西の飛行隊 後

天候は快晴。青空の下を4機の機影が通り過ぎる。

【F-4E】の後ろを【F-5E】3機が追順して飛ぶ。上から見るときれいなひし形を描いているはずだ。

現在時刻は午前11時01分。

《こちらウオードッグ、”ハートブレイク・ワン”。これより目標に接敵する。》

隊長機からの無線連絡に対し空中管制機からの返信が来る。

《こちら空中管制機”サンダーヘッド”了解。強制着陸させよ。ウオードッグ各機発砲は禁ずる。繰り返す発砲は禁ずる。》

発砲は禁ずるねえ。仲良く敵さんと遊覧飛行ってか？。そいつは愉快な話だな。

機体制御に専念しながらオレそんなことを思っていた。

《聞いたな、ひよっこども》

《2番機、了解。》

おっといけね。

「3番機、了解。」

《・・・4番！どん尻、おい、聞こえてるか、”ブービー”？。ち

やんとついて来てるか？最後尾！》

《・・・4番機、了解。》

《返事だけは一人前だな、離されるな。》

あーあー。ブービーだって。

こりゃ傑作だ。

「やれやれ、俺あ今回クジに勝って3番機でよかつたぜ。」

《黙れ、アルヴィン・H・ダヴェンポート少尉。お前も何かあだ名で呼ばりたいのか？。》

おいおい変なのは御免だぜ。

「自分は呼ばれるなら”チョッパー”であります。それ以外では応答しないかもしれないであります。」

《それは実にお前らしい呼び名だが、俺は心の中ではもっと別の名でお前を呼ぶ。いいか？。》

はあ。

「勘弁してくれよ！」

《お客さんだ、ゆくぞ。》

隊長機がいきなり進路を変える。リーダーには確かに不明機を捉えてるみたいだな。

隊列崩すと何言われるか分かったもんじゃない。

他の連中も考えは同じらしい。隊長にピッタリくっついてる。

《許可あるまで発砲は禁止する。いいか?。》

《4番機、了解。》

《よし、いい子だ。》

ブービーの奴、もう同じ轍は踏まないってか?。

確かに賢明な判断だね。

オレたちの編隊はそのまま海上へ逃れようとする国籍不明機に接近していった。

だんだん機影が見えてくる。

つてありやブラックバードじゃねえか!?

よくSAMがあたったもんだぜ。

《おしゃべり小僧チヨッパー。》

いきなりのご指名である。

「うっ。オレのあだ名はそれかい。」

まったく。小僧は余計だっつーの。

《お前は漫談の才能がある。ひとつ、降伏勧告をやってもらえんか?。》

はあ？なんつだそれ？
メンド癖え。

「どうかご自分で。」

《俺は人見知りの癖があつてなあ。》

どの口がほざきやがる。

「ちえつ。あー、あー。国籍不明機に告ぐ。我々の誘導にしたがつて進路をとれ。」

《いいぞお。》

へん。

「あー、最寄の飛行場へ誘導する。了解したらギアダウンしろ。」

”ピピピッ”

《警報！さらに数機の国籍不明機が接近。方位280、高度6000！。高速の小型機4機！。命令あるまで発砲は禁ずる！。》

ああ！？また来たのか？？

サンダーヘッドからの無線連絡。

《海を越えて偵察機の帰還援護に来るとは、殊勝シキトウな奴らだ。それでこそ戦闘機だぜ。》

隊長はやる気のようにである。

《それ、方位280！ヘッドオン！！。》

隊長機に合わせて俺らも機体を調整する。
4機か……。

《いいか、俺がいいというまで発砲はするんじゃないぞ。》

《2番機、了解。》

「3番機、了解。」

《4番機、了解。》

《よし、いい子だ。》

敵の機影が見えて来た。

”ビービ”

ミサイルアラート！？

「撃つて来たぞ！」

急いで機体を旋回させる。どつちやら誘導性はあまり高くないらしい。
機体を安定させつつ様子を伺う。

《命令あるまで発砲は禁ずる。》

はあ！？なに言ってるやがる！！！？

「ふざけんな！向こうは実弾じゃねえか！戦闘機だぜ。」

《喋ってねえで降りかかる火の粉を払え。》

《了解、ブレイズ”FOX2”！。》

おいおい！？ブービーの奴がかましやがったぞ！。

放たれたブレイズのミサイルはそのまま敵機の右翼に命中。敵はそのまま墜落していった。

《こちらサンダーヘッド。バートレット大尉それは命令違反だ！。》

アラートが鳴り響く。クッソ！ケツにつかれてる。

《阿保！これ以上部下を殺させねえんだよ。》

《エッジ、交戦！》

《ブービー、全部墜とすぞ！。》

《ブレイズ、了解。》

急旋回しつつ敵機を撒く。
なんとか振り切った。

「戦果つてあげていいのか？、やっちゃうぞ、オレ。」

《やってみな。》

さてと……。隊長の許可も下りたし。いっちょやりますか!!

「FOX2」!

放たれたミサイルは敵機のエンジンに命中、そのまま爆散した。

悪く思っなよ……。

《命令あるまで発砲は禁ずる!。》

《応戦します。》

「ヒューッ」

やるなーナガセの奴。サンダーヘッドも一発沈黙だぜ。

《敵偵察機墜落!》

《残念だな、力尽きたか……。》

まあやつこさんSAM食らって煙吹いてたしな。

《逃がすな。よく狙え。》

《射撃中止!》

へいへい。しつこいなあ。

もはやサンドヘッドに耳を貸すものはない。

「思い残すことがあるとすれば……。オレはもっとやさしい隊長

の下で飛びたかったよ。」

《ウォードッグ、発砲は禁ずると命令した。命令を守れ。》

《発砲は禁ずる。繰り返す。発砲は禁ずる。》

《1機撃破。》

ナガセの奴もやりやがったな。

「機数4、早急に駆逐せよ。」

敵の増援4機。

それに混線か。

《3番機、酔いどれみたいにぶらついてるぞ。》

「ち、ちくしょう……」

こつちとら敵2機に追いかけてらんだよ。

「ここは敵地だ。十分に注意して確実に仕留めろ。」

おーおー容赦ねえぜ。

オレは機体のピッチを下げ海面を目指す。

手持ちのUGBを海面へ向け投下しピッチを上げた。

跳ね上がる海水に視界を遮られ、敵はそのまま海中へとダイブした。

「へへへっどんなもんよ。」

《まだ終わってねえぞ。》

どうやら1機残ってたようだ。

《ブレイズ、FOX3》

だが残った1機もブレイズの機関銃に蜂の巣にされ、爆散した。
リーダーに敵の機影はない。

《ハートブレイク・ワンから各機へ異常はないか?。》

《4番機、異常なし。》

《2番機、異常なし。》

「3番機、問題なしだ。」

《よし、いいぞ。》

《すべての国籍不明機の撃墜を確認。》

《みんな生きてるな。よし、いい子ちゃんたちだ。4番機、ちゃんとついて来てるか?。よし、全員生還の今日の良き日の記念に、今後、編隊内のどこにいてもお前のことはブービーと呼ぶ、いいなわかったな。》

「やれやれだぜ。」

こりゃブレイズの奴もさぞお疲れのご様子だな。

そんなことを考えながら俺たちの初任務は全員生還で幕を閉じた。

『中央より緊急通達命令』

サンド島基地隊員各位：

- 1．今戦闘に関連する一切の口外を禁ずる。
- 2．サンド島分遣飛行隊長ジャック・バートレット大尉、基地司令部へ出頭を命ずる。

Sep. 24, 2010

発令：EO 111207、オースリア国防軍中央本部』

極西の飛行隊 後（後書き）

上手くかけていたでしょうか？

戦闘描写が少なく申し訳ありません。
まだ不慣れなものです・・・。

感想があればうれしいです。

S h o r e b i r d s (前 書 き)

今回はまたジュネット視点です。

Shorebirds

国籍不明機の墜落は伏せられた。撃墜したのは空飛ぶ円盤だったという噂さえ流れた。

公式にはまだ世界は平和のうちにある。

最初の空戦を目にした私は島を出ることが出来ない。

夕焼けに照らされる格納庫の一角で二人の男が話し込んでいた。

「けんせき譴責なんて珍しくもねえ。いつまで経っても万年大尉さ。」

紅く照らさせた滑走路を眺めながら彼、バートレット大尉はささやいた。

私は近くのベンチに腰を下ろし、静かにその話を聞く。

「戦争を伏せるのは何者でしょうか？」

「あんな、この海の間こうつていやーユークはムルスカの航空基地つきゃねえんだぜ。」

「ユークトバニアは前の戦争の友好国じゃないですか。」

「だからよ、あっちの中で何が起こってるのか今ごろしかりき釈迦力になって確かめようとしてる連中もいる。」

「ホットラインがじゃんじゃかなってるはずだぜ。この国のどこか

では。」

「いたずらに庶民の敵愾心煽るのが政治の仕事じゃねのさ。」

親密な表情でバートレット大尉は話を進める。

「ただな、軍人の石頭に理想は通じねえ。奴らが口をつぐめと一言いやあこの有様だ。」

「あんたには、すまねえことだけでもよ。」

申し訳なさそうにする大尉。
別に彼の責任ではない。

「いや、あなたたちと居られるからいい。」

「いちばん撃ちたくないのは隊長なんだよ。」

不意に後ろから声を掛けられる。
振り返るとそこにはこの基地の”おやつさん”ことピーター・N・ビーグル整備士がいた。

「隊長にはユークに恋人がいたのさ。」

懐かしむように話すおやつさん。
そんな彼に大尉が答える。

「なあに、古い戦争の傷跡さ。」

そうて彼が向けた視線の先には切り裂かれたハートのAのランプ。

彼のコールサインであり、そんな彼のエンブレムが儂く夕焼けに彩られていた・・・。

S h o r e b i r d s (後書き)

短めですいません。

感想あると嬉しいです。

開戦（前書き）

今回はプレイズです。

開戦

2010年9月27日ブリーフィングルーム

『このサンド島沿岸に、国籍不明の不審船が接近するのをリーダーが捉えた。また、当該船舶から無人偵察機（UAV）とみられる物体が射出されたことも確認されている。偵察活動を終えた無人偵察機（UAV）は、回収されるために不審船へ戻るものと予想される。回収される前に無人偵察機を捕捉、破壊し、その偵察活動を阻止せよ。なお船舶への攻撃は許可あるまで禁ずる。』

「以上が本日の作戦である。ウォードッグ隊は直ちに発進準備にかかれ。」

基地司令の命令とともにプロジェクターが解除される。

ブリーフィングルームのカーテンが開けられ、外から光が入ってくる。

「さてと、お前たち、今回は無人機が相手だ。苦戦するほどの相手じゃねえ。が、用心にこしたことはねえ。気合いれてけよ。」

それだけ言うと我らが隊長、バートレット大尉はブリーフィングルームを出て行った。

「じゃ、オレらも行きますか？。」

「ああ、さっさと終わらせてしまおう。」

「そうね。」

俺たち新米3人組はそれぞれのロッカールームへ足を運んだ。

サンド島上空。

いつもの編隊で飛ぶ俺たちに通信が入る。

《サンダーヘッドよりウォードッグ。情報収集船に戻る無人偵察機あり。回収を許すな。空中で撃ち落とせ。》

《あいよ。聞いたな、野郎ども。》

《エッジ、了解。》

《こちらチョッパー、了解。》

「ブレイズ、了解。」

《よし、いくぞ。》

4機の編隊がUAVが飛行中の区域へ向かいスロットルを上げていく。

《船には発砲するなどのお達しだ。いいな。》

「問題ありません。」

《そつだ、無人偵察機だけを狙え。ブービー！。お前のお手並みを拝見させてもらうぞ！。》

そんな隊長のお達しに思わず口元が緩む。
いいだろう、お見せするさ。

俺はスロットルをさらに上げる。

編隊最後尾からバレルロールしながら前衛へおどりだす。

後ろから隊長たちの視線を感じる。

UAVが見えて来た。

UAVは編隊で飛行しているようだ。

2機編隊2つに4機編隊1つ、合計8機か。

「ブレイズ、交戦。」

俺はまず2機編隊の最後尾を飛行中のUAV後方に回る。

機関砲のロックを解除。

「ブレイズ、FOX3!。」

機体に装備された20?機関砲M61が唸りを上げ火を噴く。UAVはあっという間に蜂の巣になった。

そのまま次のUAVに向けミサイルを放つ。命中したUAVは爆散した。

《ブービー、どうだ。この位なら楽勝だろう?。》

「ええ、問題ありません。」

《ふつ。さつさと片付けるぞ。》

隊長たちもすでに自分たちの獲物に喰らいついている。

《標的射撃でもしてるみたいだぜ。》

余裕を感じさせるダヴェンポート少尉。

そんな彼の獲物にすれ違いざまに機関砲をお見舞いした。

《おい!ブービー、俺の獲物まで横取りするなよ!。》

「おこぼれはだせない。さつさと仕留めることだ。」

《まったく……。しかし、人が乗ってないのが救いだな。》

「ああ。」

《おかげで、気兼ねなく墜とせるからな。》

”ドンッ”

機体の爆散音。

隊長とナガセ少尉がそれぞれ撃墜したようだ。
これで残り3機。

《目標は小さい。仕損じるな。》

隊長の激が飛ぶ。

言われなくてもな。

俺は編隊から外れたUAVに接近する。

ダヴェンポート少尉も次の獲物に接近しつつある。

《偵察機の次は無人機ってわけか。妙な避け方しやがる。》

そう言いつつミサイルをお見舞い。

敵機を破壊した。

「だが、所詮無人機だ。」

俺はUAVのエンジン部に機関砲を当てる。

燃料に引火しUAVは鉄くずになった。

もうレーダーにUAVは映っていない。

《警報！国籍不明機多数の接近を探知。》

空中管制機からの無線連絡が入る。

《このあいだと同じ方位か?。》

《方位280、同じだ!》

《向こうはどれだけの数を国境にそろえてんだ。こっちはこの4機つきりだぜ。そら、退避しろこっちだ。》

隊長に合わせて退避行動に移る。

《俺のケツについて来れるか?。》

「問題ありません。」

ふりかかるGを感じながらスロットルを上げていく。

《間に合わねえよ、追いつかれる。》

《今日のどん尻はお前か、ロックンローラー。待ってる今助けてやる。》

《今日はくじ引きでまけたんだああ!。!。》

言うや否や隊長は急旋回を始める。

旋回はただでさえGを強く感じると言うのにそれをほぼトップスピードの状態から入るとは……。改めて隊長のタフネスさに感心する。

《お前らも見てねえで降りかかる火の粉をさっさと払え。》

「ブレイズ、了解！」

《エッジ、了解。》

《心配するな。いつもの訓練通りにやればいい。》

そう言いつつ次々と敵機を墜としていく隊長。

《バートレット大尉！！。》

空中管制機から遠吠えが聞こえる。

《隊長の後ろに1機。撃墜します。》

隊長に喰い付いていた敵をナガセ少尉のミサイルが襲う。

《ほいよ。やるじゃねえか。》

《攻撃確認、反撃します。》

ヘッドオンからの攻撃を回避、そのまま敵の後ろにつく。
大した度胸だ。

《エッジ、交戦。》

《ハートブレイク・ワン、交戦。》

《チョッパー、交戦。》

「ブレイズ、交戦。」

《ウォードッグ、交戦許可はまだ出してない!。》

《ブービー、全部墜とすぞ!。》

「了解。」

俺は機体を反転させる。

「敵部隊、反撃を開始!」

すれ違いざまに20?弾をお見舞いする。

”ドーン”

《交戦許可無しで撃墜だと?。何を考えているんだウォードッグ!。》

《グッドキル、ブレイズ!。》

「ああ!!。」

体が熱くなる。だが頭は冷静に。

《オレもまけてらんねえぜ。》

ダヴェンポート少尉はそのままミサイルを放つ。

ミサイルは敵機のコックピットに命中。即死である。

《さっきのドローンの仕返しってわけか?。》

少尉は後ろの敵2機を撒きながら無線を飛ばす。

《どこから来たんだ？。このあいだの奴らの仲間か？。》

「方位280からの飛来。おそろくな。」

俺はダヴェンポート少尉の後ろにつく2機に向けミサイルを放つ。
1機は炎に包まれ、もう1機は回避した。

「ちっ」

回避した敵が反撃してくる。

敵の20？弾が機体の近くを通り過ぎていく。

「はあ、はあ、はあ」

操縦桿が重い。少しでも気を抜いたらやられる。

《こつちだ！ブービー！。》

視界に隊長機の姿を捉える。

俺は隊長とのクロスレンジに機体を合わせる。

………今だ！。

俺は機体ピッチを上げる。

すると機体の船底を隊長が放った弾丸が通り過ぎる。
通り過ぎた弾丸は敵機体に突き刺さった。

”ドン”

「はぁー、はぁー」

何とか俺は呼吸を整える。

《すべての戦闘機の撃墜を確認。》

終わったのか？。

《警報が解除にならない。引き続き対空警戒を怠るな。》

《気をつけるナガセ！。敵は下にもいるぞ！。》

隊長の忠告と同時に敵船舶からSAMが発射される。

SAMはそのままナガセ少尉の下へ向かっていく。

《!?!、くっ!?!》

機体を急旋回させるナガセ少尉。

そこに隊長が機体を滑り込ませ、ミサイルの標的を変更させた。

機体をロールさせ、時間を稼ぐもミサイルは隊長機の右翼に命中した。

《隊長!?!。》

ナガセ少尉が叫ぶ。

隊長の機体はだんだん高度が下がっていく。

《ばかつ、涙声なんか出すんじゃない。ちよっくらベイルアウトするだけだ。機体なんぞ消耗品。搭乗員が生還すりゃ大勝利だ。救難

へりと俺の予備機の整備の手配、頼んだぜ。》

”パシユツ”

煙を上げる機体からパイロットが射出される。

「こちらブレイズ、パラシュートの開散を確認。」

《警報！警報！、ウォードッグ全機、至急基地に帰還！》

《救助へりの到着がまだです。》

《救助隊に任せろ！。基地で燃料弾薬を補充して再発進！。敵は宣戦布告した。》

《何だつて！？》

宣戦布告？。また戦争が始まるのか……。

「ブレイズ、了解。」

《ブレイズ！。》

《おい！ブービー！。》

「隊長なら大丈夫だ。あの人のタフさ。俺たちが一番よく知っている。今は俺たちに来ることをやろう。」

《……OK、わかったよ。チョッパー、了解。》

《……エッジ、了解。》

俺達は次の作戦行動のため基地への帰還を開始した。
出撃前と違い、3機の編隊となつて……。

『無人偵察機および武力行使をした国籍不明機は撃墜された。』

国籍不明の不審船は領海域から離脱、偵察活動は阻止された。

作戦中に撃墜されたバートレット大尉の捜索は、周辺海域の安全の確認を行い次第開始する。

なお、ユークトバニア連邦共和国は、我がオースリア連邦に対する宣戦布告を行った。』

開戦（後書き）

この回はナガセ視点で書いてみたかんですが、やはりブレイズにしました。

このころからリーダーシップを発揮させていた感じにしたかったからです。

感想あるとうれしいです。

Narrow Margin (前書き)

今回はジユネット視点です。

Narrow Margin

広さおよそ8畳の二人部屋。窓のそばには2段ベッドとソファー。入口近くにはPC備え付けのデスクと小物棚が宛がわれている。

ここは私が軍に用意された部屋。

または牢獄。

牢獄と言ってもどこの囚人のような扱いを受けているワケではないのだが。

「搭乗員宿舎 9月27日 12時05分」

現在、私の部屋には電話をしている人物がいる。

ハミルトン大尉。

私を閉じ込めた基地司令官の副官にしては話の出来る男だ。
私のカメラも彼が取り返してくれた。

伯父が軍人でなかったら私のような職業に就きたかったといって。

今は電話が終わり何やら考え事をしている。

「たった今、あなたを閉じ込めてた理由がなくなったよ。」

「えっ？」

「ユークトバニアが宣戦布告した。宣戦同時攻撃だ。セント・ヒュ
ーレット軍港が空襲を受けている。」

彼はそう私に伝えると足早に部屋を出て行った。

窓の外から戦闘機のエンジン音が聞こえる。

ブラインドのむこうの滑走路には離陸していく彼らの姿が見えた。

「彼らは3機しかない?。」

飛び立つ【F-5E】の機影を見ながら私は思わず呟いた。

Narrow Margin (後書き)

短めですいません。

次回はいよいよ本格的な開戦です。

感想があると嬉しいです。

間隙の第一波 前篇（前書き）

今回はエッジ視点です。

間隙の第一波 前篇

私たちはあの後補給を済ませたのち、すぐさま離陸した。ブリーフィングは移動中に行うとの通達のみでまだ詳しい話は聞かされてない。

本音を言えば私はすぐにも隊長の下へ向かいたかった。でもそれは出来ない。私たちは軍人であり、公私を混合させてはいけない。

あの時、ブレイズは私たちに言った「隊長を信じろ」って。だから私は今私に出来ることをやり遂げる。

”ピピピッ”

《緊急事態につき。この時間で戦況を説明する。》

『ユークトバニア航空部隊による奇襲攻撃を受けていると、セント・ヒューレット軍港から入電があった。現在港全体は極度の混乱状態にある。港にはオーシア第3艦隊の艦艇が停泊中であり、敵の攻撃にさらされている。セント・ヒューレット軍港に急行し、艦艇の湾外への脱出を支援せよ。なお第3艦隊の中核を成す空母ケストレルだけは必ず守り抜け。』

《以上が作戦内容だ。全機健闘を祈る。》

本部からの伝達が終了した。これから私たちはセント・ヒューレット軍港へ急行する。

《サンダーヘッドよりウォードッグ。エッジ、編隊の指揮を執れ。》
違う指揮を執るべきは私ではない。

「いいえ。ブレイズ、前に立って私は後につく。」

《ナガセ少尉、命令に従え。》

「いいえ。指揮はブレイズが。私は後ろを守る。」

そう。

「もう1番機を落とさせはしない。」

これは私の決意。

あの時あまかった私に対するケジメ。

《ナガセ少尉……》

「大丈夫ブレイズ。貴方なら出来る。私は貴方の指示に従う。」

《オレもだブービー。お前に任せるぜ。》

《了解した。サンダーヘッド。ここは俺が指揮する。》

《こちらサンダーヘッド。了解した。》

《うるうるしてるな！ここは戦場だ！。そこらじゅうにいる敵に喰われるぞー！。》

無線と同時に1機の【F-14A】が高速で通り過ぎて行った。
あれは・・・ケストレルの艦載機？。

《ひえーい。俺はどん尻でいいよ。》

そうしている内に軍港が見えて来た。

《こちらソーズマン。スノー大尉だ。次の敵編隊を迎撃する。位置を知らせよ。》

《こちら対空艦エクスキャリバー。前方をふさぐ艦。離れてくれ！。SPYレーダーが照射できない！。》

《こちらウォードッグ。交戦区域に入った。》

《ウォードッグ。交戦を許可する。》

ついに戦闘が始まる。

いつも軽口をたたく隊長は今はいない。

《ブレイズ、交戦。》

「エッジ、交戦。」

《チョッパー、交戦。》

3機の編隊は軍港へ向けて機体を傾ける。

「私が後ろを守る。いいわね、ブレイズ?。」

《了解した。後ろを頼む。》

「ええ。」

私たちは対艦ミサイルを搭載した機体に対して攻撃を開始する。

《ブレイズ、”FOX2”!。》

ブレイズのミサイルは敵の【A-6E】に向かい命中。敵機はそのまま湾内に墜落して行った。

《隣の給油艦が爆発した!消火艇はどこだ?本艦に燃え移る!助け
てくれ!。》

《何故侵入に気付かなかったんだ?》

情報通り湾内はかなり混乱している様子。

「エッジ、”FOX2”!。」

私は対空艦を狙っていた敵機に向けミサイルを放つ。

「ミサイルの命中を確認。」

そのまま次のターゲットを探す。

「「停泊艦ばかりだ、まるで演習だな。」」

「「敵の増援部隊を確認。警戒しろ。」」

《隊長。指示はいつでもオーケーだぜ。》

《そうか。ならばこれより分散して敵の各個撃破にあたる。全機ブレイク!。》

「エッジ、了解。」

《チョッパ、了解。》

ブレイズの指示に従い私は対艦機の護衛戦闘機に狙いを定める。
……今!。

”ブオオオオ”

機関砲の唸りとともに敵機から火が上がる。

《消火艇が爆発に巻き込まれたぞ。2隻・・・いや3隻…燃えてるぞ!。》

《これは演習ではないんだぞ!。》

《見りゃ分かんذار!ばかやるー!!。》

「目標は敵空母及び随伴する大型艦艇。湾外への脱出を許すな。すべて仕留めろ。」

《ケストレルを守れ!。》

《今こそ盾の役割を果たす。》

敵の爆撃が緩む気配は見られない。

「ブレイズ、こちらエッジ。空母ケストレルを確認できますか?。」

《ああ、捕捉している。》

機体を傾ける。港には多少の被弾が見られるものの健在な空母の姿が見える。

「こちらからも捕捉できました。まだ大丈夫のよう。」

3機目の敵機に機関砲を浴びせる。

被弾した敵機は燃料をばら撒きながら海面へと突っ込んでいった。

「湾全体が炎の中に。」

海面に浮かぶ燃料に引火したのか、湾が燃えている。

《なんだ、この損害は？。オレ様の想像力を上回るとは、どうなってるんだ。》

後ろから来る敵機の攻撃を躲しながら反撃の機会を伺う。

《こちらは空母ケストレル。港口へ向かう。》

《了解、ケストレル。ケストレルの脱出を優先しろ！。その艇！気持ちわかるが道を開けろ！空母は貴重品なんだ！。》

《上空よりミサイル着弾11時方向、距離200m》

敵のミサイルをフレアで回避。

そのまま急旋回して相手の後方に回る。

「FOX2」！！

”ドロン”

「敵機撃破。」

《グッドキル。》

《ヒュー。やるねー。》

《ケストレル出港完了！いい航海を！。》

「ブレイズ。ケストレルが出港したわ。」

《確認した。》

大型空母ケストレルが湾外へ向けて動き出す。

《上空の味方戦闘機、ケストレルを守ってやってくれ！。》

《こちらソーズマン。今、向かう俺たちの艦だ。》

《駄目だ。こちらサンダーヘッド。空中管制機指揮官だ。ソーズマンは東セクターに留まれ。持ち場を守り戦闘を続行せよ。》

《あれは俺の母艦なんだ！。》

《ウォードッグ。ケストレルの直衛につけ。》

《石頭ヤローめ！任せたぞウォードッグ。俺たちの母艦を。》

《こちらブレイズ。了解した。全機ケストレルを守るぞ。》

「エッジ、了解。」

《チョッパ、了解。》

リーダーにケストレルに向かう敵影を捕捉する。

「ブレイズ！」

《下だ！。大橋の下からくるぞ！！。》

湾口の橋の下から低空侵入を試みる敵機。
すぐさま私たちは高度を下げる。

《ケストレル湾口まで3マイル。》

「A隊は敵艦艇へ、B隊は港湾施設を破壊、C隊は上空制圧だ。」

《敵対艦ミサイル発射、フランクス撃ち方始め！。》
《衝撃に備えろ！。来るぞ！。》

空母を狙う敵は2機。

《エッジ！。右の奴を頼む。》

「了解。ブレイズ。」

《チョッパー。上空の奴らを。》

《あいよ！。隊長。》

私とブレイズは海面スレスレまで高度を下げる。
射程圏内までもう少し……。

”ピー”

はいった！。

「エッジ、”FOX2”。」

《ブレイズ、”FOX2”》

機体から短距離ミサイルが発射される。

”ボーン”、”ドンツ”

私たちはピッチを上げ、高度をとる。

《敵機の撃破を確認。ギリギリだったな》

「ええ、何とか間に合った。」

空母への損害は軽微。このまま湾を抜ければ……。

!?

ふと海面に視線を向けた私の目に移ったもの。
それは……。

「あの波間に浮いているのは……人?。」

後編へ続く……。

間隙の第一波 前篇（後書き）

うまく書けたでしょうか？。

感想あるとうれしいです。

間隙の第一波 後篇(前書き)

今回はチョッパー視点です。

間隙の第一波 後篇

ヤバいもん見ちまった。

あの敵機が墜落して炎で海を埋める前、あそこに浮いてたのは……。

あれは人間の顔だったんじゃないか……。

あんなにたくさん……。

やめてくれ……。

もうこんなのはたくさんだ……。

「ブービー、あれを見たか？」

《……ああ。》

「お前も見たのか。あの海……。ナガセは？」

《ええ。私も……》

大勢の人間が炎に包まれた。上空からでもわかる。彼らの悲鳴が……叫びが……。まるで脳裏に焼き付いたビデオテープのように巻き戻される。

吐き気がしそうだ……。

《湾を出られたからといってぬかるなよ。》

下から無線が飛ぶ。

そつだ。まだ悲しんでる場合じゃねえ。

「空母が外海に出る。頼むぜ誰かよう。あいつを無事に逃がしてやってくれ。」

オレたちは引き続き空母の護衛にあたる。

港はすでに抜けた。

あとは外海に抜け出すだけ。

《こちらは空母ケストレル艦長。無事に脱出に成功した各艦、おめでとう。これより小官が指揮を執り、臨時戦隊を編成する。前方に敵艦隊の封鎖線がある。これを突破し、安全な海域へ脱出しよう。諸君の健闘を祈る。上空の味方機。援護を頼む。》

空母を基点に艦隊が編成されつつある。

同時に艦載機も何機か上がって来た。

《前方より大型爆撃機が複数接近している。エッジ、チョッパーは

敵爆撃機を。俺は敵艦艇をやる。》

さすが、ブレイズ。周りが見えてるな。

「チョッパー、了解。」

《エッジ、了解。》

俺は前方の【MIMROD】大型爆撃機に機体を向ける。
ヘッドオンだ!!。

”ブオオオオ”

”ドンッ”

俺の機関砲はコックピットではなく敵機のエンジンに命中した。

「ちっ。まだ墜ちねえか!。」

弾は敵機のエンジンに命中したもののまだ3つエンジンが残ってやがる。

タフな機体だ。

「もう一度アプローチに入る。」

機体を反転させ。もう一度被弾した敵機を狙う。

”ビービ”

!!、ミサイルアラート!?

オレはすぐさま機体を捻らせる。

するとミサイルが機体側面を通り過ぎた。

しかし、旋回して戻ってくる。

「くそっ！。Q A A Mか!？。」

ミサイルとの命がけの追いかけてっこが始まる。

「ナガセ！。被弾した機体を頼む。」

《エッジ、了解。》

《チョッパ！。援護は必要か?》

「問題ねえブービー。こいつは俺がやる。」

ミサイルから逃げ回るオレにさらにミサイルを放つ敵の【F・35 C】。

そんなに恨まれる覚えはねえがッ。

機体を急旋回させ、機首を敵艦艇へ向ける。
特殊兵装”UGB”のセーフティーを解除。

「駄目出しだ。貰っとけ。」

敵艦艇の弾幕を回避しつつUGBを投下。敵艦は炎に包まれ、俺を追っていたミサイルも炎の中突っ込んでいった。

「へっ。どんなもんよ。」

オレはその後やたらしっこかった敵機の背後をとる。

「くっく」

「散々追っかけ廻したんだ。今度はオレのターンだぜ。」

オレは機関砲の標準を敵に合わせる。

「くらいな！」

”ブオオオオ”

機関砲の唸りとともに弾丸が敵機へと吸い込まれていく。

「「がつ！！。クソッ。被弾した！！。」」

弾はどうやら敵の右翼に命中したようだ。

敵は煙を噴きながらも尚飛行している。

「「ちい。アロー！。離脱する。」」

敵は艦隊の弾幕に紛れ、離脱していった。

「あーあー。逃げられちゃったぜ。」

《封鎖線までの距離を確認。4マイル》

《長距離射程の対艦ミサイルに注意しろ。》

《今だ！。対艦ミサイル発射！。敵艦を突破する。》

艦隊は敵の封鎖線にさしかかる。

「「空母を狙え。敵の指揮系統を潰すんだ。」」

「「爆撃隊何をやっている！。早く沈めろ！」」

《こちらブレイズ。敵艦艇への攻撃を続行する。》

ブレイズは封鎖線を引こうとする敵艦艇にUGBを投下していく。

《エッジ、敵爆撃機を破壊。これより対艦攻撃へ移る。》

《ブレイズ、了解。》

「チョッパー、了解。オレも敵艦を沈める。」

オレはUGBを構える。

《あの包囲網を中央突破するだど？。そんな無茶だ！。》

《何隻かやられるのは覚悟しないとな。》

艦隊は尚も前進する。

「ターゲットロック。」

敵艦の弾幕が機体を掠める。

冷や汗が止まらない。

「UGB”投下！。」

《投下！。》

《投下！。》

”トトトーン”

水柱が3つ上がった。

《敵包囲網が乱れたぞ！。》

《今だ！。突破しろ！！。》

艦隊が次々と突破していく。

「くそつ。2番艦、3番艦。損害報告!。」

「2番艦。火災発生ならびに艦全体に亀裂。浸水してます。」

「3番艦!。」

「ザー。ザー。」

「くそツ。駄目だ。突破される。」

《こちら護衛艦。ケストレルの突破を確認!。》

「突破しやがった!。へビーなサーフボードだぜい!。ヤー!!!。」

敵は敗北を悟ったのか撤退していく。

オレはブレイズの下へ向かう。

「ところでブービー、隊長になった気分はイイもんか?。」

《はっ。まさか。気苦労が絶えないよ。》

「へっへっへ。頼りにしてるぜ。」

オレたちは再び編隊を組む。

《こちらは空母ケストレル艦長。本艦隊は安全な海域への脱出に成功した。海、そして空の勇士たちに感謝する。》

サンド島への帰還中。

《・・・1・2・3。1、2、3機。何度数えてもオレたちや3機とも無事だぞ。見てろよ隊長の奴。海から上がってきたら自慢してやるからな!。》

《ふっ。それはいい。》

《ええ。》

劇戦を乗り越えた彼らは

我らが隊長に戦果を報告すべく

サンド島基地を目指す。

だが、隊長

バートレット大尉がサンド島に還ることは二度となかった。

間隙の第一波 後篇(後書き)

アレ？何かチョッパーの戦闘技術がブレイズより高い気が・・・。
(汗)

感想お待ちしております。

F r i s t f l i s s t (前書き)

シユネット視点です。

F r i s t f l i g h t

救助ヘリが到着した時、海上に彼の姿はなく。

ただ遠ざかる敵の情報船だけが見えたという。

この世の果て、平和からの島流しの地であったこの島が

敵国にもっとも接近した最前線基地となった。

「搭乗者宿舎 9月27日 19時27分」

「明日からの1番機？。心配していると年取るぜ。」

そんなことを言いながら。

彼らが隊のムードメーカーこと。

ダヴェンポート少尉はソファアに深く腰掛けた。

「うちは分遣隊だからな。本土から本隊の中佐殿が来て、俺たちの上に乗っかる。それだけさ。」

部屋に流れるロックを聴きつつ少尉は上機嫌に語る。

「ふっ。これでこそ落ち着くぜ。この音色。今夜は良く眠れそう
だ。」

「隊長のハートブレイクの相手 ユーク陸軍情報部の少佐だって？」

敵国の女性それも自分より階級が上の者との失恋話。

彼はホント大した男である。

「オレだって歴史の勉強はしたさ。そんなときや味方同士だったんだ。
基地司令官の査問つても野暮なもんだったな。」

「へへっ」隊長の行動に不信箇所はなかったか?』だと。不審が
あるのは野郎の頭の構造だけ。」

我らがボス。基地司令官どのは隊長、バートレット大尉の失踪につ
いて

彼は敵国のスパイではなかったのではないかと疑っている様子であ
る。

「ったく。いい性格してやがんだよ。」

”ウーウーウー”
!?

「はあ!?!。おい。空襲警報だぜええ。勘弁してくれよ!。」

そう言い残しダヴェンポート少尉は部屋を出て行った。

緊急時非常徴集。

ついにここも戦場になるようだ。

「私も避難しないと・・・。」

そう呟きつつ私はかかりっ放しのCDの電源を落とした。

F r i s t f l i g h t (後書き)

いよいよ彼の登場です。

上手く離陸できるでしょうか。(笑)

感想お待ちしております。

初陣（前書き）

ブレイズ視点です。

初陣

《緊急発進急げ！離陸可能な機体から空中退避！》

空から爆音が響く。

鋼の鳥たちが互いに獲物を喰いあう。

《空襲警報！敵爆撃機、接近中！》

狭いコックピットの中。

これから俺はこの狩場に足を踏み入れる。

《スクランブル発進し、迎撃せよ！》

《くっそ！。タービンの回転が上がらねえ》

ダヴェンポート少尉の焦り声が聞こえる。

地上にいる戦闘機は敵から見たら格好の的である。

俺も機体チエックを続ける。

「油圧チエック…OK。各稼働翼…問題なし。エンジン…回転数安定。…」

《急げ、急げ、急げ、急げ！》

ようやくくろ番機が動き出す。

「少し落ち着け。チョッパ！」

《だってよ ”ドーン” うわっち!。》

滑走路近くに味方機が墜落する。

その上を敵機が高速で通り過ぎていく。

《あつぶねー。こりゃ上の方がまだ安全だぜ。》

そついうとダヴェンポート少尉はそのまま離陸していく。

《ハンガーに隊長の予備機が。》

《もついい構うんじゃない。上がったら出来るだけ早く高度を取るんだ。敵にかぶられるんじゃないぞ。よし、今だ!。敵の第一波が通り過ぎた。》

おやっさんの激がとぶ。

《ブレイズ、緊急発進急げ!。》

「了解。こちらブレイズ。続けて離陸する。」

俺は滑走路へ機体を入れる。

「進路クリア。エンジン回転数上昇。」

俺はスロットルを徐々に上げていく。

と同時に機体も加速していく。

20...30...40...

前方から敵機が接近してくる。

不味いな・・・。

俺は尚もスロットルを上げる。

70…80…90…

先に離陸したダヴェンポート少尉が敵機に機関砲を放つ。

おかげで敵機の注意が逸れた。

「120…130…140…。今！」

俺は機体ピッチを上げる。

体が押し上げられる感覚。

無事に離陸できたようだ。

「チョッパー。援護感謝する。」

《あいよ。》

《ブレイズ、高度制限を解除する。俺たちの基地を守ってくれ。》

「ああ、任せろ！」

俺は先に上がったダヴェンポート少尉と合流する。

《おい、ブービー。ナガセの奴も上がって来たぜ。》

滑走路に目を向ける。1機の【F-5E】が空へ上がってくる。

「確認した。エッジ。機体に異常はないか？」

《こちらエッジ。大丈夫よブレイズ。》

ナガセ少尉も合流し編隊を組む。

《管制塔よりウォードッグ、爆撃機の撃墜に向かえ、滑走路を奴らにやらせるな。》

「こちらウォードッグ。了解した。」

俺達は敵爆撃機の破壊に向かう。

《なんとか上がったようだな。機体の機嫌はいいかい？》

おやっさんから通信が入る。

機体もいつも通りに動く相変わらずいい腕だ。

「ああ、全機問題ない。」

《そりゃ良かった。備えておいた甲斐があったな。》

”ピピピッ”

《こちらウォードッグ・リーダー、フォード中佐だ。サンド島へアブローチ中。何が起きているのか？。》

本部から派遣された中佐から連絡が入る。

《来やがったぜ、本隊の中佐殿だ。》

こんな時に……。

《こちら基地管制塔。当基地は敵の空襲下にある。繰り返す、当基地は敵の空襲下にある。》

「まずは爆撃機をやる。全機ブレイク。」

《エッジ、了解。》

《はいよ。チョッパー、了解。》

俺たちは二手に分かれる。

《我々が到着するまで滑走路を維持できるんでろっな？》

「何としても死守して見せます。中佐。」

《そうだ。いかなる犠牲を払ってでも死守してくれ。》

・・・いかなる犠牲も・・・か。

” ビービ ”

ロックされたか・・・。

俺はすぐに回避行動に入る。

減速と同時に機体を捻らせる。敵はそのままオーバーランした。

「ブレイズ。” FOX 2 ”。」

放たれたミサイルはそのまま敵機に命中、破壊した。

《消火班、武器庫への延焼を防げ。》

《可燃物を運び出せ。弾薬もだ。》

邪魔が入ったな……。

《こちらチョッパー！ ブービー、ターゲットが分かるか？》

「いや。今索敵中だ。そちらは？」

《こっちは見つけた。護衛機もいやがる。あいつらの狙いは基地自体の破壊だ。》

《先ほどの敵爆撃機、反転してサンド島へ再接近します。》

《これは阻止しなくちゃなんねい。それはオレにもわかるぞ。》

「反転する機体はエッジに任せる。チョッパーは捕捉した爆撃機を。俺も見つけた。」

俺達はそれぞれのターゲットへ向かう。

敵の爆撃機【B-1B】は機関砲の弾幕をはる。

「後方に回ればどうと言うことはない。」

俺は敵の後ろに回る。

4基あるエンジンの内、左側2基に20？弾を喰らわせる。

エンジンを失った敵は機体を大きく傾け。そのまま墜落していった。

《ああ！オレの部屋のロクコレクション！守らなきゃいけないものだらけだ！。》

《前進配備に切り替え。島の前面洋上で防御する！。》

ダヴェンポート少尉は相変わらずだな・・・。

「こちらブレイズ。敵爆撃機を撃破した。」

《オーケー、ブービー。こっちも墜とした。》

《こちらエッジ。下も上も混乱しているわ。私たちの戦力をもっと集中させたらどうかしら。》

戦線は混乱している・・・。

ここは何としても敵の勢いを抑えたいところだな。

「了解した。各機、敵の注意をこちらに引き付けるぞ。」

《了解、ブレイズ。では前方に火力を集めます。》

俺達は次の爆撃機編隊に進路を向ける。

「爆撃機はチョッパーが。エッジ、護衛機は俺達で仕留めるぞ。」

《エッジ了解。》

《チョッパー了解。》

「よし。全機攻撃開始。」

まず俺とナガセ少尉が先行する。

敵は爆撃機2機に護衛機4機の編隊。

まず俺が敵爆撃機に攻撃を仕掛けようとする。

するとそれを阻止しようと護衛機が俺に集まる。

「後ろは任せたぞ。」
《もちろん。》

俺の後方についてきた敵をナガセ少尉の機関砲が襲つ。
”ドン”

《一機撃破。》

敵は俺の意図に気付いたらしい。
狙いを俺からナガセ少尉に変える。

俺は機体を反転させ、
標的を変えた敵機2機をロックする。

「ブレイズ。”FOX2”。」

発射されたミサイルにより敵機は炎に包まれた。

「2機撃破。敵護衛機残り1。」

残った敵機に狙いを定める。
しかし敵は尚も回避行動をとる。

「ちつ。ロックが安定しない。」

俺は敵の後方に喰い付く。

《こちらチョッパー。敵爆撃機を破壊した。》
《了解。敵の勢いが落ちたわ。》

”ピー”
ロック音が響く。

「FOX2」!。」

ミサイルは旋回する敵機のエンジンに命中。そのまま爆散した。

《おい。下を見る。》

視線を破壊した敵機から変える。

《おやじさんが上がる。》

地上から荷物運搬機が上がる。

《おい。ハンガーを見る。》

そこには隊長の予備機である【F-5E】が滑走路へ向かっていた。

《誰だ?。誰が引つ張り出したんだ。》

《グリムです。整備班を手伝ってハンガーにいました。離陸します。》

まったく、無茶をする!。

《お前には無理だ補習教育が済んでねえ。他の予備搭乗員はどうした?。》

《姿も見えませんが》

《もう間に合わない。気をつけてグリム。護ってあげる。》

《やってみます。》

機体は滑走路へと進んでいく。

《敵第二波接近中。》

《ブービー、グリムが上がってくる。頼りないが……このまま見てるのか?。》

「まさか。敵の注意を引く。」

《了解。奴をフォローしてやるうぜ。》

俺たちは敵の第二波に対し攻撃を続行する。

《操縦系統は大丈夫。》

「「これ以上の離陸を許すな。」」

ダヴェンポート少尉が敵の爆撃機を抑える。

ナガセ少尉はグリム一等空士の上空を旋回、近づく敵機をけん制している。

《今のグリムは敵から見ればいい的。護ってあげないと。》

俺は敵の【F-16C】に狙いを定める。

《油圧系は・・・異常なし。》

”ブオオオオ”

「ちい。ハズレた。」

《あの無茶な野郎は誰だ!?!。》

「もう一機が離陸しつつある。」

敵の一機がグリム一等空士を狙う。

「させるか!。」

俺は機関砲を放つ。

”ブオオオオ”

”ドンッ”

敵機のコックピットに命中。そのまま地面にキスした。

《エンジン音良好。整備兵に感謝・・・。》

《いつでも助けられるように準備をしておけ。》

《頭低くして伏せてろ!。》

《今の爆発は近かったな。》

ナガセ少尉を狙う敵に向かう。

《燃料チエック。これだけあれば何とかなる。》

くっ。気付かれたか。

敵はこちらから距離を取る。

《座席射出装置も問題なし。》

「敵が離陸中。地上で破壊しろ。」

《はん！。させつかよ。》

射程に入らない。

”ビービ”

ミサイルアラート！！。

俺は緊急フレアを放出。

”ドンッ”

ミサイルの余波で機体が揺れる。

《こちらグリム。これより離陸します。上から確認できますか？》

《こちらエッジ。大丈夫よ。》

《了解。少し安心しました。》

姿勢制御。損傷確認・・・異常なし。

《離陸開始位置に到達、エンジン最大出力！。》

《戻れ、戻るんだ！。》

《止めるな、行かせてやれ。》

機体反転。反撃開始！。

俺は敵とのヘッドオンを狙う。

バレルロールしつつ、敵胴体部に機関砲を当てる。

”ブロロロ” ”ボフツ”

「クツ。やられた。」

敵機は煙を上げて高度を下げていく。

「敵機が上がってくる。」

《上がれ、上がれ！、もっと上がれ！。》

グリム一等空士の機体が高度を上げる。

《上がりました！！。》

「こちらブレイズ。離陸を確認。」

《グリム！。こっちへ来い。俺の後ろにつけ。》

《了解です。》

俺達は4機で編隊を組む。

《こちらグリム一等空士、コールサインは”アーチャー”。管制塔および全機に連絡。本機はこれよりウォードッグ隊に加わります。》

《こちら管制塔、了解。ブレイズ、彼を頼んだぞ。》

「こちらブレイズ。了解。アーチャー、貴官を歓迎する。遅れるなよ。」

《はい！。よろしく願います。》

グリム一等空士には緊張の色が見えるもの特に問題はない様子だ。

《こちらウォードッグ・リーダー。サンド島、燃料がない。着陸許可を求める。》

《無理ですフォード中佐！。空襲中なんだ。》

《空中の味方機、本体の着陸を援護せよ。》

《阿保が！。》

《ダヴェンポート少尉か？。》

《そうですね。》

《着陸後に矯正してやら・・・》

”ドーン”

!?

《火を噴いた!。中佐が落ちた。》

爆散する中佐の機体。

あれでは生きてはいまい。

《敵第三波接近。》

《こちら管制塔。増援の爆撃機が接近中。急ぎ向かい撃墜せよ。》

「全機。護衛機は後まわしだ。爆撃機を狙え。」

《エッジ、了解。》

《チョッパー、了解。》

《ア、アーチャー、了解。》

「落ち着けアーチャー!。俺がフォローする。」

《りょ・了解です。》

「よし。ブレイク!。」

俺達は分散行動に入る。

《あぶなっかしい飛び方だな。》

《あいつまで離陸とは・・・この基地もいよいよか?。》

《索敵レーダーに気をつけて。敵の機影が映るから。絶対に後ろにつかれないで。》

《大丈夫です。教科書通りにやってみます。》

俺とアーチャーは爆撃機へと接近する。

「セーフティを解除し、敵をロックするんだ。敵から目を離すなよ。」

グリム一等空士に爆撃機をまかせ俺は護衛機の梅雨払いをする。

《ロック解除。レーダー照射。捕捉!。》

「よし、撃て。」

《了解!。アーチャー、”FOX2”。》

グリム一等空士の放ったミサイルは敵爆撃機の胴体部分に命中。弾薬に引火し、機体を爆散させた。

「こちらブレイズ。爆撃機の撃墜を確認。」

「くそっ、爆撃機がすべてやられたぞ。」

「作戦失敗か……。全機撤退する。」

敵が撤退していく。

どうやら終わりの様だ……。

《管制塔より全機へ、爆撃機的全滅を確認。みんなよく守ってくれた!。》

「ふう……。」

さすがに疲れた。

”ピュピュッ”

《僕はうまく飛べたでしょうか?。》

グリム一等空士から無線が入る。

彼は初めての实战で見事生き延びた。

「ああ、今こうして生き延びている。それが証拠さ。」

《ありがとうございます。サポートのおかげです。》

《グリムのやつ、取り越し苦労でよかったぜ。》

《ほら、歓迎の準備をしろ!。》

上空で隊を再編成した俺達は着陸態勢に入る。

滑走路に進入し、まもなく停止する機体からふと基地に目を向ける。

基地の方は多少ながら被害が出てしまった。

だが、俺達は今回もまた一人も欠けることなく生き延びることが出来た。

今だけは、

このよろこびに浸っていたいと強く感じる。

初陣（後書き）

グリムの活躍がすくなかったかな？。

でも彼の様子ではさすがに戦闘機の相手はキツかったのではないかと思います。

読んで下さりありがとうございます。

F i r s t f l i g h t 2 (前書き)

今回は特に短いです。
ジュネットの語りだけです。

First flight 2

一夜明けた空

おやじさんがこともなげに帰ってきた。

まるで大空こそ開闢以来の安全な我が家であるかのように。

開戦からまだ17時間。

だが実に濃密かつ大変な1日となった。

ユークの作戦はオーシアに反撃に転じる隙を与えぬ綿密なスケジュールに基づいたものようだった。
しかしそれによって彼らはどれほどの戦果があげられたのだろうか。

推測に難くない。

もうひとつ。

私には報道班員の辞令が来た。

何もやることのなかった私としては願ったり叶ったりである。

これもハミルトン大尉が気を回してくれたらしい。

彼の意気な計らいには感謝の意を感じずにはいられないものである。

返してもらったカメラを手にした私はすると早速こんなものを撮ってしまおう。

窓際のソファアーの上、ラフな格好に身を包んだ女性がひとり。

これは搭乗員室のナガセ少尉。

一同から離れ、時々本に何かを書き込んでいる。

何を書いているのか誰も知らない。

・・・私に書く記事があるとすれば、彼らのことなのかもしれない。

きつとそつなのだらうじつ。。。

F i r s t f l i g h t 2 (後書き)

開戦から17時間まさに電撃作戦ですね。

分かりにくかったかもしれませんがどうかご容赦を。

第三艦隊終結 前？（前書き）

今回は作戦前の話です。

主観はブレイズになります。

第三艦隊終結 前？

「搭乗者宿舎9月30日午前10時30分」

あの戦闘から1日が過ぎ、現在も復興作業が急ピッチで行われている。

グリム一等空士は帰還後熱烈な歓迎を受けたものの無断出撃並び危険行動により基地管制官にこっぴどく絞られていた。

だが、初陣で初の撃墜を果たした彼の評価は意外に高く、そのままウォードッグ隊に組み込まれることとなった。

それと同時に先の戦闘で戦死したフォード中佐に代わり

俺に正式にウォードッグ隊リーダーとなるよう辞令が届いた。

つい四日前まではただの新人パイロットだのひよっこだの言われ続けてきた俺がだ。

戦争ほど人を変えるものはない。

俺は常々そう思う。

「何しけた面してんだ？、ブービー。」

「はあく。俺のことはブレイズと呼べと言ってるだろう。ダヴェンポート少尉。」

搭乗員室にて休息を取っていた俺にダヴェンポート少尉が話かけて来た。
相変わらずの様子である。

「堅いこと言うなよ。隊長殿。」

「まったく……。隊長の気疲れが今ならよく分かる。」

「おいおい。そりゃねえぜ。」

他愛もない会話。

しかしこんな会話のできるパイロット仲間はまだ俺達の隊だけとなつてしまった。

「ところで何の用だ？。」

「はあ。お前って奴は……。まあいい。それよりお前今暇か？。」

「？。特に用事はないな。……。何かあるのか？。」

俺はニヤケ顔の彼に多少不安を感じつつ聞いてみる。

「実はな。昨日ジュネットの奴が面白い写真を撮ってるって話を聞いてよ。ちよっくら奴の部屋にお邪魔しに行こうかと思ってたんだよ。」

なるほど。

詰まるところ彼も暇なのだな。

「おもしろい写真?。」

「ああ、なんでもナガセの写真やら通信室の子たちの写真やらより取り見取りらしい。」

・・・なんとなく彼の考えが読めてきた。
別におもしろいと言うわけではないようだ。

「いや、俺は遠慮しておく。」

「はあ!?!。なんだよ、ノリ悪いなあ。さてはすでに枯れてんのか?。」

んな!?!?

か、枯れてるって・・・。

「失礼な。俺はこう見えてもまだ25だ。」

「わーってるよそんなこと。そんで?なんで行かねえんだ?。」

いろいろ言いたいこともあるが今は置いておこう。

「単純に興味がないからだ。」

「やっぱり枯れてんのか。」

くっくくくく

「ダヴェンポート少尉。君とは少し話をする必要があるようだ。」

「ははっ枯れ木に話すことなんざねえよ。」

……ぶちっ。

「少尉!!。」

「やっべ。」

ダヴェンポート少尉は即座に逃げ出す。
フフフ。ニ・ガ・ス・カ。

「いっ」

”ビーン”

!??。

徴集警報!?

「ちい。」

「まったく。あとで覚えているよ。」

そう言い残すと俺はブリーフィングルームへ足を運んだ。

ブリーフィングルームにて……。

「気をつけ。聞け。ユークトバニア電撃戦の唯一の失態は我が軍の空母をすべて撃ち漏らしたことである。敵の奇襲攻撃を逃れた空母をいったん内海に避難させ、これを其幹に反撃勢力を再建築する。かくも重要な作戦に動員されたことを心してかれ。」

『本日1500時、イーグリーン海峡に、オーシア第三艦隊の空母が集結する。集結するのはヴァルチャー、バザード、先のセント・ヒューレット軍港からの脱出に成功したケストレルの三つの空母である。今回の任務は、空母ケストレルに随伴して行動し、艦隊の合流を護衛することだ。なお、敵の攻撃に遭遇した際には、3空母を必ず守り抜け。使用する機体は、不測の事態に備え、空中、地上両面

の脅威に対応できるよう、選定せよ。』

「以上だ諸君の健闘を祈る。」

ブリーフィング終了後……。

「さて少尉。O H A N A S I の時間だ。」

「ちょ……落ち着けブレイズ……。」

「問答無用だ。」

「ひっ、ぎゃあああああああああああああああ。」

その光景を目に來た兵曰く。

「円卓の鬼神でした。」

「いや、リボン付きの悪魔でした。」

などよく分からない証言が多かつたとか……。

4時間後……。

「イーグリン海峡9月30日15時30分」

Side：チョッパー

なんてことはねえ。
ちよろいもんだったさ。

そのはずだったんだ。

オレたちだけじゃねえ。

手に入るだけの兵力総動員さ。

空は味方の飛行機もいっばい、敵の出る隙もねえ。

海の女王様方は無事に内海に入ったさ。

ここまで来りゃもう裏庭だ。

あとは無事に帰還するだけ。

そう・・・オレたちの任務はこれで終わるはずだったんだ。

第三艦隊終結 前？（後書き）

ハイ。ギャグパート兼シリアス突入でした。

たまにはこのようなゆるい話もありかと。

感想お待ちしてます。

第三艦隊終結（前書き）

アーチャー視点です。

第三艦隊終結

《こちらサンダーヘッド。敵の航空攻撃可能圏外に到達した。順次所属基地への帰還を許可する。》

薄暗いくもり空の中。

僕らは今イーグリーン海峡にてオーシア艦隊を護衛している。だがそれも終わりあとは帰還するだけ。

《遠方より飛来の隊には基地までの帰投用燃料を与える空母上空で待て。》

出撃前。僕らは基地司令に新しい機体を手配してもらった。

【F-14A】。単純な空中戦闘能力で見たら【F-5E】を軽く凌駕する。

この機体の特徴は可変翼の自動調整により低速から高速度域にかけの安定した機動性をみせるところである。

特殊兵装として搭載された”SAM”セミアクティブ空対空ミサイルの存在もこの機体の戦闘能力を高くしている利点といえよう。

《周りは帰り始めてるぜ。オレたちはまだかよ。》

《ウォードッグ隊。空母上空で給油機を待てといっている。》

《はあ。やれやれだぜ。》

チヨッパ少尉の気持ちもわかる気がしますがここは我慢です。

「このまま給油機を待ちましょう。」

他の編隊はもうだいぶバラけている。
僕らもこのまま空中給油機を待つ。

ん？何だ？レーダーに何か映ってる。

《おい。なんだこりゃ。レーダーの故障か？》

「いえ。こつちにも出てます。」

レーダーに映ったものそれは明らかに敵戦闘機の機影だった。
遠目ながら目視のできる距離まで接近している。

《どっから出て来たんだ？。サンダー・石頭・ヘッド野郎は気付いてねえのか？おい、ブービー。》

「隊長って呼ばなきゃ。」

《細かいこというな。おい、こりゃ通報した方がよかあねえか？。》

《このタイミングでの飛来。目的は明らかだ。全機。コンバットオ
ーブン。》

隊長の指示に従い僕らは戦闘態勢にはいる。

《エッジ、交戦。》

「アーチャー、交戦！」

《チョッパー、交戦。》

《て、敵接近！各隊戻れ！空母を護れ！。》

《へっ。ようやく気づきやがったか。》

ウォードッグ隊は他の隊より先に接敵する。

《セーフティー解除。ブレイズ。”FOX2”。》

”ドンッ”

隊長のミサイルが敵機に命中する。
致命打だ。

《空母は全部で3隻。1隻たりとも沈めさせるな!。》

《このままじゃ上がれない。上の敵を落としてくれ。!》

《わかった。今、助けてやる。待ってる!。》

旋回し敵の背後をとる。

敵はロツクを逃れようと左右に機体を揺らす。

”ピー”

捕らえた!。

「アーチャー、”FOX2”。」

ミサイルが飛んでいく。

敵は左へ旋回。

そのままを回避した。

「くっ、ハズれた。」

僕はそのまま敵を追いかける。

《視界が悪い。奇襲には絶好の場所とタイミングね。》

《ああ。雲に入られたら厄介だ。》

《そうね、全てが裏目に出てると思えない。》

再び敵を捕らえた。

「落ち着け、実戦は一度経験しているんだ。」

僕は敵の背後にピッタリくつつく。

！！今！。

”ブオオオオ”

機関砲から弾が放たれる。

弾丸は見事敵のエンジン部に命中した。

「よしつ。燃料残量チェック・・・まだ、大丈夫。」

僕は引き続き索敵を開始する。

《こちら空母バザード。前方にミサイル着弾。相当な揺れだ。》

《こちら空母ヴァルチャー。ミサイルをくらったが、被害は軽微。》

《なぜこのタイミングで敵機が？。》

ナガセ少尉が疑問を口にしている。

「よくわかんないけど、何かが変わた。・・・敵襲ってどういつもの
なんででしょうか？」

周りを見渡すと味方の戦闘機が敵を撃墜していた。
どうやら再展開できたようだ。

「対艦ミサイルを破棄して応戦してもいいか？」

「駄目だ。対艦攻撃を優先する。」

敵も応戦するものの動きが鈍い。
そんな敵の1機に狙いをつける。

《エッジ、”FOX2”！。》

《こいつら動きがとろいな。》

「敵が対艦ミサイルを抱えてたらずいす。」

敵との距離が詰まる。
機関砲の射程内だ。

「アーチャー、”FOX3”。」
”ブオオオオ”

”ドンッ”

敵のミサイルに誘爆する。
敵機はそのまま鉄屑となった。

《燃料計が故障してないことを祈るぜ。いいか、このオレ様が祈ってやったんだぜ。》

《ケストレル。残りの2空母と合流せよ。》

《艦載機が上がって来た!。》

ケストレル、ヴァルチャー、バザードから艦載機が次々上がっている。
く。

《よし、発艦したぞ、来るなら来い。》

《ソーズマンの発艦を確認。》

《おー、やっと上がってきてくれたぞ。待ってたぜ!。》

味方の増援により形勢が完全にこちらのモノとなる。

《スノー大尉、防空戦闘を任せる。》

《了解です、艦長。任務に就きます。》

《よし、我が隊はこれより敵の掃討にあたる。》

「艦載機が上がって来たぞ！」

「この海域で避けるのは無理だろうな。」

《長距離対艦ミサイル接近！。》

長距離対艦ミサイルを搭載した敵機が遠距離攻撃に切り替えたようだ。

「一撃離脱だ。正確に狙え。」

対艦ミサイルが空母バザードに命中する。

”ドンッ”

《こちらバザード。右舷着弾！。火災発生！。》

「ミサイルが命中した!。」

《まだ大丈夫だ。全機。長距離対艦ミサイルを搭載した機体を落とす。》

《エッジ、了解。前方に火力を集中します。》

《チョッパー、了解。》

「アーチャー、了解。」

僕らは長距離攻撃を行う機体を狙う。

《こちらケストレル。合流までまだ少し時間がかかる。》

《了解。なるべく急いでくれ。》

見えた!。

《全機。特殊兵装の使用を許可する。》

「了解。」 S A A M ” 起動します。」

僕は特殊兵装のセーフティーを解除する。

通常ミサイルだと先に長距離対艦ミサイルを発射されてしまう。

《ブレイズ、”FOX1”。》

《エッジ、”FOX1”。》

《チョッパー、”FOX1”。》

ロック確認！。

「アーチャー、”FOX1”。」

それぞれ発射されたS A A Mは対艦攻撃を行おうとする機体に向かっていく。

「「！！。長距離ミサイル接近！！。」」

「「回避しろ！！。」」

「「駄目だ。数が多い。」」

「「くそっ。うわっ！？。」」

”ドドドオンッ”

4機の内3機が撃墜された。

《一機避けたか。》

「「よくもやってくれたな！。セーフティ解除。」」

避けた敵機がケストレルに向け長距離対艦ミサイルを発射した。

「敵ミサイル発射！」

《ちっ。やってくれる。こちらブレイズ。敵機を頼む。》

《おいおい。どうするつもりだ？。》

《相対速度を合わせてミサイルを落とす。》

「そんな！？。無茶ですよ！！。」

《時間がない。あとは頼むぞ。》

それだけ言うと隊長は機体を反転させる。

戦闘機に比べてミサイルの方が速度は速い。

だがそれでも隊長は機体の速度を上げていく。

今は丁度隊長の機体をミサイルが追いかけている構図となっている。

するとミサイルが隊長の機体を後ろから追い抜いた。

”ドンッ”
直後、ミサイルがレーダーから消えた。

《はっ、マジかよ。》

《まさかホントにミサイルを落とすなんて……》

僕も二人と同意見である。

「敵機が離脱していく。」

長距離対艦ミサイルを発射した敵はすでに離脱していた。

「了解。上空へ離脱します。」

敵機が高度を上げて去っていく……。

”ピピピッ”

《ウォードッグ隊、防衛任務を解く。改めて空母上空で給油機を待て。》

《ブレイズ、了解。空母上空で待機する。》

僕らはケストレル上空を目指し旋回する。
敵はどうやら諦めたみたいだ。

「何とか空母を護れましたね。」

《ああ、まったくの無傷とまではいかなかったがな。》

《にしても無茶しやがるぜ。ミサイルを追っかけて撃ち落とすなん
ぢ。》

”ピュピュ”

《弾道ミサイル接近!!。》

「弾道ミサイルって!。いったいどこから発射したんだ!?。」

一本の白い柱が空から降ってくる。

”ドーン”

《おい・・・なんだよあれは?》

”ドオオオオオン”

突如空が光に覆われた。

《味方の編隊が消えた!。》

《空母が、空母が被弾した!。傾斜してゆく!。》

爆発の後そこに味方機の姿はなく。
空母バザードが撃沈していった。

《誰か! いったい何が?。》

《分からん、とにかく高度5000フィート以下のものは全滅した
!。》

難を逃れたのはウォードッグ隊とスノー大尉だけだった。

《ミサイル第二弾飛来!。》

《くそうっ! 生き残りたければ、弾着までに高度5000フィート
以上に上昇しろ!。各機急げ! ケストレル退避しろ!。》

《どうするんだ? ブービー。オレはお前に付いていく。》

上も下も今は混乱している。

「5000フィートってのは確かなんですか？」

《おそろくな。全機高度を上げる！。5000フィート以上に上昇
！。》

「こちらアーチャー、了解です。隊長についてゆきます。」

僕はすぐさま機首を上げる。

《甲板から人がこぼれ落ちている！。》

《また一隻沈むぞ！。》

”ピュピュ”

《着弾まであと10秒、8、7・・・》

僕は高度7000フィートに到着した。

《5、4、3、2、弾着、今！。》

”ンーン”

空中に爆弾がばら撒かれる。

”ドオオオオオン”

撒かれた爆弾は一斉に爆発。

5000フィート以下を包み込んだ。

《ああつ、また!》

《ヴァルチャーが直撃を喰らった!轟沈する!。》

《なんてことなんだ。俺たちの艦隊が・・・くそっ!。》

《総員退艦!。急げ!。沈むぞ!。》

《あの攻撃は一体なんだ?鉄の雨が降ってきたみたいだ!。いったいどうなってるんだ!。》

空母が2隻沈んだ。

残ったケストレルも被害は甚大である。

《こちらケストレル。生き残った機は報告せよ。》

《こちらソーズマン、何とか生き残った・・・。ウォードッグ隊も生き延びたようだな。》

《ああ、こちらブレイズ。なんとか全機無事だ。》

僕らはケストレル上空を旋回する。

「空母が2隻も……。あんなにいた味方機がこれしかない。」

《基地へ帰る燃料もねえ。》

”ピ。ピッ。ピ。ピッ”

《サンド島隊。空中給油機を回せない。そのまま北東へ進みハイエ
ルラーク基地へ向かえ。地上で給油を受けよ。》

サンダーヘッドからの伝達。

僕らは北東へ進路をとる。

《ブービーー！やい！。》

「隊長って呼ばなきや。」

《違うんだ。隊長なら隊長らしくオレたちのことをボロクソにいつ
て欲しい。あの声がねえとさびしくってだめなんだ。》

「今日も僕たちを無事に連れ帰ってくれたんだよ。今では彼が僕ら
の隊長なんだ。」

《そのとおり。そして私は二度と私の1番機を失わない。どこまで

も援護する。》

そして生き残った僕らは北東の地、ハイエルラーク基地を目指し飛び続けた。

【戦闘記録】

敵攻撃部隊は撤退した。

今戦闘において、強力な散弾ミサイルの攻撃により、空母ヴァルチヤー、空母バザードが失われた。

水中聴音情報の解析により、攻撃はユークトバニア・ミサイル潜水空母シンファクシによるものと断定された。

同艦のスペックは不詳ながらも、先の戦争以前のユークトバニアの建艦計画が存在していたことはこれで明らかとなった。

潜水空母シンファクシ。これを最大級の脅威とする。

【中央より緊急通達命令】

我が軍も、敵潜水艦に対抗するため、”アークバード”を戦力投入することを決定した。

第三艦隊終結（後書き）

散弾ミサイルパネエ。

A C E C O M B A T XのグレイプニルのS W B Mと一緒に使われたらもはや逃げ場がないですね。

White bird (前書き)

ヒツジの語りです。

White bird

「オーリック湾 9月30日 19時29分」

給油のために向かう 北の地方。

だが ここはまだいい。

私たちが飛ぶさらに向こうにはノルト・ベルカへの閉ざされた門がそびえる。

15年前、進撃する連合軍を防ごうとベルカ人が七発の核を起爆させ自らを北の谷に閉じ込めてしまった。

その歴史そのものが我々への戒めだったのではなかったか。

門の入り口にあったベルカ人の七つの町は蒸発し今でも放射線を放っている。

ここはかつてのベルカ人の地。

今はオーシアの信託統治領。

ノースオーシア州

この土地をその名で呼ぶと『いや、ここは南ベルカなのだ。』と土地の人に内心腹を立てたような顔をされる。

ハイエルラークは私たちもお世話になった練習飛行隊の飛行場。

到着すると、

私たちの経験談を聞こうとする後輩たちに取り囲まれた。

ジュネットの書いた記事が私たちよりも早くこの基地に到着していたのだった。

そんな彼らにチョッパーが大げさに話し、グリムが捕捉し、私が訂正する。

後輩たちはみなはしゃいでいた。

話の後ブレイズは私にそつと語った。

『戦争は人を大きく変える。良くも悪くも。だが……自分の意思や覚悟は変えてはならない。』

彼の父の友人が語った言葉だそうだ。

そして、その友人はあの激戦のベルカの空を飛び。散っていったそう
うだ……。。

いつのまにか私たちはこの戦争でもっとも実戦経験の多いパイロット
トになっていた。

バートレット大尉のひよっこの私たちが……。

「マクネリア空軍基地 9月31日 07時51分」

サンド島へ帰るとき。

経験の浅い彼らを引率するよう指示された。

ぎこちない足取りで飛ぶ彼ら。

その様はまるで親鳥の後を追う雛のようだ。

《おい、おやじさんに感謝でもしよつぜ。》

《なんですか？。》

《おっさんがみっちり航法教えといてくれたおかげさ。おかげでオシらは連中に向かってエバれる。》

道中、チョッパは意気揚々と語る。

まっただ。

航法も空中給油もおぼつかず、途中の基地ごとに着陸を繰り返すしかない彼らまで

西の沿岸の守りに投入しなければならないなんて・・・。

願わくば、彼らが一人も欠けることなく飛び続けられることを思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1384ba/>

ACE COMBAT 5 The Unsung War

2012年1月10日10時08分発行